

## タタルスタンとバシコルトスタンにおける教育政策とエリート形成

関 啓子（一橋大学）

多文化社会あるいは多民族空間で人々はどのように生きてきたか、そして生きているか。何が民族間関係を規定し、何が異民族間に反発や不快を増幅させ、何がそれらの緩和をもたらすのか。異なる民族との関係を生きのびるという課題、あるいは異なる文化の中で折り合いをつけ生きるという課題は、ある人間の一生のある時期に終了するものではなく、一人の一生の、しかも日常生活のここかしこで直面するものである。それは人間形成全般にかかわるものなのである。とくにエスニック・マイノリティのようにあるスティグマを貼られた人々の場合、異文化を生きるという課題はまさしく一生の問題となる。人間形成の過程は、基本的には「生殖性」の問題<sup>\*1</sup>、すなわち「次の世代を確立させ導くことへの関心」<sup>\*2</sup>の具体化である、と考えられる。それは、次の世代からすれば、社会的に生きるある生き方を身に付け、生き続けることであり、ひとりだち（あるいは自立）の過程と言い換えられよう。この過程は、ひとりだちをする人と、ひとりだちをさせる人あるいはそれを励まし支え助ける人（あるいは人々）との間に繰り広げられるドラマで、両者間に働きかけあいが生じ、ある関係が結ばれることで展開していく。この・生まれ、育ち、働き、老い、死ぬまでの過程は、ひとりだちの思想とその実現のための手立ての選択、そして実行によって織り上げられるタピストリーのようなものである。このタピストリーに織り込まれている民族間葛藤の質とそれを緩和あるいは解消する手立て、時にはそれを増幅させる要素を引き上げられないものか。そのためには少なくとも、どのような「人づくり」にかかわる教育・文化政策がとられたかを調べるとともに、かれらの日常生活とそこでの語りと振る舞いの中に、権力や政策に対する向き合い方、政策や法令についてのかれらの生活の知恵としての解釈を読み取ることが大切であろう。こうした解読の積み重ねが、共感を欠いた共存を、共感を伴う共存に変容させる過程の演出を可能にすることに繋がらないものか<sup>\*3</sup>。

ここでは、こうした課題意識のもと、民族意識の自覚化にこだわり、独自の経済改革に着手するタタルスタンとバシコルトスタンに注目し、そこにおけるエリート養成と中間層の成立過程を、ソ連邦時代と連邦崩壊後との、いわば垂直比較をも交え、水平的に比較検討する。なぜなら、民族意識にこだわるのは民族エリートであるからであり、かれらの形成過程とリーダーシップに、民族意識へのこだわりの契機や導因を読み取ることができよう。こうして、民族へのこだわりの奥に潜むものを浮上させ、

\*1\*2 E. H. エリクソン『幼児期と社会』（仁科弥生訳）みすず書房、1978年、（第2刷）343頁。

\*3 祖父江孝男「文化人類学の立場から」（『異文化間教育』No.11、1997年）、27頁を参照。

それらの、両共和国における共通性とそれぞれの独自性を洗いだすことに成功すれば、異民族共存の明日をつくる可能性を人工的に設定する手がかりあるいはシナリオを発見する第一歩となるだろう。

## 1. ソ連邦におけるエリートの形成

エリートとはここでは「いかなる活動範疇においても『リードする』人々」、「社会組織や社会制度において公的権威を伴う高い地位を占める諸個人」\*4を意味する。エリートの類型化を試みたギデンズの説にもとづき、補充と統合という指標を用いて、ソ連型エリートの特徴を析出すれば以下になるだろう。第一に、補充が開放的である。諸エリート集団は「多様な階級[階層]的背景の持ち主を構成員とする」\*5。「共産党がエリートの地位に接近する主要な経路であり、それはきわめて低い社会層の出身であることの多い人々にとり、移動を達成するための手段と」なった\*6。第二に、統合度が高い。多様な階層の出身者からなるにもかかわらず、党とのかかわりという不可欠の共通項目があるため、エリート集団内および諸エリート集団間の統合度は高い。第三に、政治的エリートと経済的エリートが融合している場合が多く、統合的権力の争点網羅性は広く、権力の掌握度合は独裁的である。ギデンズは、補充が開放的で、統合度の高い連帯的エリートの例として、旧ソ連を含む国家社会主義社会のエリートをあげていた。

ソ連社会では、社会的背景のさまざまな人々からエリートが形成されたわけだが、その基底には平等主義があった。かつては、ソ連ではエリート形成において、労働者や農民であることを背景にもつ人を優遇する平等主義的政策がとられた。権力はこうして労働者・農民の支持を取り付けたわけだが、同様の配慮が非ロシア人にも払われた。すなわち、非ロシア人を統合・管理するために、非ロシア人の共産党幹部の育成が重視され、非ロシア人エリートの養成が図られたのである。階層・階級、民族という観点からすれば、エリートの補充はかなり開かれていたことになる。

確かに、政治エリートの上層には労働者・農民出身者が多かったが、いわば「エリート第二世代」ともなると事情が異なり、ホワイトカラーを背景とするものが増え始めた。エリートの補充が開放的ということは、私的所有の廃止とかかわっており、ソ連邦では所得や経済力に物を言わせて有利な社会的機会と地位を手にすることがなかったということを意味している。かわって、教育、特に高等教育や技術教育が重要な意

---

\*4 Anthony Giddens, *The Class Structure of the Advanced Societies* (London, 1973). ギデンズ著、市川統洋訳『先進社会の階級構造』みすず書房、1984年(1977年初版)、119頁。

\*5 前書、120頁。

\*6 同上。

味をもった。また、高等教育機関は、党の学校という意味を帯びていた。というのは、教育の内容が一定の思想性を育むように編まれていたからであり、そのため大学等の教育機関は、エリートが統合的であり、権力が独裁的であり続けるための基礎を築くところとして機能した。

高等教育は、もう一つの役割を果たしてきた。ロシア語化を介したエリートのロシア化である。非ロシア人インテリゲンチヤはロシア語で読み、書き、考える様式を身に付け、ロシア語は教養のシンボルとなった。また、ロシア化した非ロシア人にならないと、非ロシア人が軍人として成功することは難しかった。エリートであればあるほど、ロシア語話者化していたから、結果としてエリート集団内部と集団間の統合は強化された。

私的財産によるエリートへの道は存在しないので、教育の相続の意味は極大化していった。高い社会的地位にある人は、その地位の再生産を願って、子どもの教育に熱心であった。子どもの大学進学への親の期待度をめぐるスヴェルドロフスク州での1966年の調査は、親の学歴の高さと子どもへの学歴期待の高さとが相関していることを示すことになったし<sup>\*7</sup>、1979年に実施されたモスクワ総合大学自然科学部の志願者(11,615人)を対象とした調査は、「生徒の成績は、親の学歴が高いほど、また専門家の子弟ほど高い。これがそのまま大学入試の試験の成績に反映する」ことを明らかにすることになった<sup>\*8</sup>。親の学歴・階層と子どもの学歴との間に一定の相関関係があるという事態は、60年代半ばも70年代末もかわりがなかった。ただ、教育に費用がかからないこともあり、肉体的労働者層も、子どもに階層移動の願いを託し、子どもの教育に熱心であり、この熱意が実を結ぶこともあった。その証拠に資本主義社会に比べ、肉体的労働から非肉体的労働への世代間移動の率は小さくなかったと指摘されている<sup>\*9</sup>。

フルシチョフ期には、大学入試に労働体験者の優遇措置を盛り込むこととなるが、それは、増加しつつあったホワイトカラーを背景とする青年たちの直接的な大学入学に抑制をかけるという意味を帯び、その結果、労働者階級と結びつく国家・社会というイメージをエリート形成にも付与することに成功した。これにより、以下に見るように、大学進学者の社会的出自の分布は大きく変わったが、専門家養成の非効率などの批判がよせられたことは周知の通りである。特に学歴の高い親は、ストレート入学枠の縮小には大いに不満であった。出自の変わりようを数字で示せば、「1955年の入学者の社会的出自は、労働者29.5%、勤務員63.5%、農民7.0%であった」のに対して、

---

\*7 相原次男『ソビエト高等教育の社会政策的研究』風間書房、1994年、52頁。

\*8 前書、53頁。

\*9 ギデンズ、前掲書、242頁などを参照。

「1964年には、それぞれ50.0%、43.3%、6.7%、と大きく変化」したことになる<sup>\*10</sup>。

## 2. ソ連邦のホワイトカラー層についての考察

教育の量的拡大政策がとられ、高等教育の拡大もはかられると、市場価値のある技能や知識をもつ人々がしだいに多くなっていった。「技術的に訓練された大衆的エリート」<sup>\*11</sup>の形成が急がれ、職場訓練などの企業内教育(生涯教育)システムが動きだし、教育の質をめぐる問題を残しつつも、職場をはなれた短期・長期の教育・訓練の機会が設定された<sup>\*12</sup>。

「専門職的、または管理職的職業の獲得を可能にした、ある種の専門分化された形態の高等教育や技術教育を受けた」個人(=インテリゲンチヤ)<sup>\*13</sup>が増加した。ソヴェト社会は一度は、「肉体的労働者や農民の子弟の教育の達成機会の優遇政策」によって、「ホワイトカラーを背景とする人たちの高等教育の支配を打ち破る」<sup>\*14</sup>ことになったが、しだいに上層の党指導者が、肉体労働者層の出身者よりもインテリゲンチヤによって占められる傾向が顕在化した。1959年、党員の約48%は産業肉体労働者で、残りの31%が農民、非肉体労働者は全体の20%に過ぎなかったが、1968年には、党員に占める肉体労働者と農民の割合はそれぞれ39%、16%に減少し、それとは逆に、非肉体労働者の割合が45%強と著しく増加した<sup>\*15</sup>。

無産の非肉体労働者またはホワイトカラーを中間層(階級)とすれば、この中間層のあり方にソ連の特徴というものがあったのだろうか。資本主義社会と異なり、ソ連社会主義社会では、所得や昇進の機会において労働者等の基礎的階級と中間層との間に大差がなかった。これは一つの特徴である。肉体的労働者と非肉体的労働者との所得や経済的報酬の格差、および熟練と非熟練労働者の同様の格差は革命後著しく縮小した。熟練労働者の所得は1940年代には下層ホワイトカラーをややしのいだが、1977年にははるかに上回ることとなった<sup>\*16</sup>。資本主義社会のホワイトカラーが浴する仕事の安定性や恩給や療養手当などの多種の賃銀外給付等の有利さが、ソ連のホワイトカラーにはもたらされなかった<sup>\*17</sup>。したがって、エリート層に食い込まなければ、中間層であることのメリットは実感されにくいこととなる。

---

\*10 相原次男、前掲書、46頁。

\*11 ギデンズ、前掲書、247頁。

\*12 関啓子「ソヴェトにおける教育の再編」『一橋大学研究年報 社会学研究 27』を参照。

\*13 ギデンズ、前掲書、247頁。

\*14 ギデンズ、242頁。

\*15 前書、250頁。

\*16 前書、240頁。

\*17 前書、241頁。

しだいに多くなる中間層に属する人々に特有の不満が蓄積されていった。それは、第一に、学歴が高いのに、熱意と能力に見合った仕事がないというものだ。次に、プロレタリア優遇の賃銀形態に甘んじなくてはならないことである。彼らがプロレタリアの社会というイメージを払拭したいと考えるようになっても不思議ではない。

さらに、ホワイトカラーを背景とする青年にありがちなことだが、大学でのイデオロギー的啓蒙に馴染めず、エリート予備軍から脱落してしまう人も少なくなかった。インテリゲンチヤであっても、党とのかかわりの強さを維持できなければ、高い社会的な地位にはつけない。そこで、党派性の有無が社会的自己実現の可能性を決定してしまうことは、理不尽ではないかといった考えが芽生え、脱イデオロギー化と思想の自由への要求が高まっていった。

1987年の大学改革が大学入学試験から労働体験者への優遇措置を排除した理由の一つは、こうしたホワイトカラー層の不満を解き、かれらをペレストロイカ支持者として掴み続けようとする試みであった。

### 3. 非ロシア人の中間層の不满

高等教育をうけた非ロシア人の中間層も成立しつつあった。かれらの不満は、上記の中間層の不满につけるものではなく、かれらに独特の不满を募らせていった。第一に、ロシア人は都市部に住み、労働者階級の多数を占めるため、労働者階級の優遇を旨とする党の政策はロシア人本位になりがちであった。

第二に、かれらの出番は、中央集権的指令経済のもとでの強いられた産業構造により左右された。一般的に農村地区には、教育機関も少なく、自己を発揮する職場も少ない。

第三に、学歴のもつ意味が、非ロシア人の場合、ロシア人より小さかった。高学歴の非ロシア人よりもロシア人の専門職継承率が高かった、と指摘されている。例えば、「高学歴者では、タートル人よりもロシア人の都会での階層上昇機会が大きかった」<sup>\*18</sup> といった具合である。

一般的に中間層は階級意識に乏しく、階層・階級にもとづく集団的アイデンティティを持ちにくい。それでもかつての党とのかかわりによる統合という経験が、かれらに連帯の習慣を育んだかもしれない。それに加え、民族アイデンティティが、集団のアイデンティティとして機能した。それを支えたのは、生活世界での母語の維持である。学校教育ではロシア語化を余儀無くされても(名目では教授言語は父母と学習者が選択するとなっていたが、学歴志向者ならばロシア語を教授用言語として選択せ

---

\*18 森岡修一「多民族の言語政策と教育の諸相」、川野辺敏監修、遠藤忠・岩崎正吾編『ロシアの教育・過去と未来』新読書社、1996年、371頁。

ざるをえなかったが)、母語は階層・階級を越えて、とくに農村部でしっかりと維持された。産む・嫁ぐ・死ぬといった人生の重要な節目と深くきり結び、生活様式の画一化の網の目からもれた日常生活の場面や宗教ともつながりをもちつつ維持された母語は、アイデンティティのよりどころとして機能した。

民族エリートがエリートとして生き残れるかどうかは、民族アイデンティティの主体として自己表出できるかどうかにかかっていたし、現在も同様である。当然、ロシア語に長けた都市部のエリートもまた母語を維持することとなったのである。

#### 4. 民族意識のあり方をめぐるタタルスタンとバシコルトスタンとの比較

現在、タタルスタンとバシコルトスタンの両共和国は、民族アイデンティティの確立を人間形成過程における課題として強く意識している。しかも、タタル人とバシキール人にとっては以前から母語による教育への執着も格別が高かった。1990年の段階で、ロシア連邦内の民族学校の教授言語は23言語を数えたが(その内4言語は旧ソ連邦構成共和国の母語であったが)、初等・中等教育の1年生から11年生まで母語による教育を行う民族学校は、いうまでもないロシア語による学校に加えて、タタル語、バシキール語、そしてグルジア語によるものであった<sup>\*19</sup>。

これまでの中央集権的指令経済下で強い役割から自由になり、ロシアによる収奪から解放されるために、ナショナリズムを高揚させ、民族アイデンティティを確立する必要がある、とされる点で両共和国は共通している。民族エリートにとってナショナリズムは、権力と政策主体が求心力を高め、共和国が自治的経済発展を遂げるための手段である。しかも両共和国は石油などの資源にめぐまれ、経済改革も比較的順調である。両共和国とも主な宗教はイスラーム教であり、宗教施設の復興も目覚ましい。

しかし、ソ連邦の崩壊の前後における民族意識へのこだわりは、その早さと強さにおいてタタル人とバシキール人とでは若干異なる。タタル人の方が早く、かつ民族アイデンティティへのこだわりが強い。たとえば、教育省の大臣や教育行政関係者および教師へのインタビューから知られる民族教育への思い入れの度合いも、両共和国では大きく異なり、タタルスタンの人々の方が深い。加えて、タタルスタンでは民族学校の増加も著しい<sup>\*20</sup>。こうした違いは何に由来するのか。多民族・多文化であることにかかわる教育・文化政策の違いあるいは人々のそれらへの対処の仕方に違いがあるのか。ソ連時代と比べ、エリートのありようと養成に変化はみられるのかどうかにも注目しながら、この問題を検討してみたい。

\*19 Леонтьев А. А. Культуры и языки народов России, стран СНГ и Балтии. -М., 1998. -С.48.

\*20 См.: Лучшие школы г. Казани. -Казань, 1996.

まず、当然考えられることは、住民の民族構成比である。タタルスタンの場合、名称民族であるタタル人の占める割合は、第一位で約48%、次がロシア人の43%で、都市部ではロシア人の比率が高まるが、最近では都市部のタタル人比率も徐々に向上している。住民構成比の第三位はチュヴァシ人だが、4%に満たないから、概ね二つの民族が拮抗した状態であることが知られる。他方、バシコルトスタンでは、人口の民族構成比の第一位はロシア人で39.3%、第二位はタタル人の28.4%、つぎが漸くバシキール人で21.9%である。

エリートと中間層のありようを両共和国で比較すると、民族間関係の特徴がいつそうよく見えてくる。しかもそれが、ソ連邦時代の政策の遺産であることも了解される。すなわち、ソ連時代の産業構造とそこでの名称民族に課された役割と、それに連動した各民族の学歴水準とがホワイトカラー層に属する名称民族の割合を規定してきた。バシキール人は農林業を主に担当し、ロシア人が科学や工業部門を、タタル人が商業で活躍してきたのである<sup>\*21</sup>。このことは専門家の民族構成に反映した。バシコルトスタンにおける技術専門家の民族比率は、ロシア人53%、タタル人25%、バシキール人13%である<sup>\*22</sup>。大学・アカデミー研究員の民族比率も類似しており、ロシア人54%、タタル人19.5%、バシキール人13.5%である<sup>\*23</sup>。つまり、バシコルトスタンでは、タタルスタンほど民族インテリゲンチヤが形成されなかったのである。

そこで、民族エリートの養成に対する課題意識は、バシコルトスタンのバシキール人の方が高いはずであると推測できるが、実際は少し様相を異にしている。確かに、いまでは主なポストをバシキール人が占める傾向が見られるが、しかしそれはあるポストを複数の民族が競った場合にに限られると、バシコルトスタンの非バシキール人は見ている。このように非バシキール人の被害者意識(被差別感)が小さいことが、バシキール化の穏やかさを示唆している。

むしろ、エリートの自民族化に熱意を傾けているのはタタルスタンの方である。ここではエリート養成にナショナリズムが影をおとしつつある。植民地的事態からの完全な脱却を、エリート養成機関である大学での教授言語の民族語化にもとめようとしている。そこで民族語を話せる教授層の養成と確保、科学的術語の民族語化が課題となって浮上してくる。現在の大学教師にはタタル語ができないものもいるし、母語を話せても、ロシア語で教育されてきたものたちにとって科学の伝達を民族語化することは恐ろしく難しい。

このようにエリートの養成が民族化すると、エリートの補充が民族上で均質化傾向

---

\*21 Ирнazarов Р.И. О связи экономических и межнациональных отношений//Социологические исследования. -№.8, 1997. -С.53.

\*22 Там же.

\*23 Там же.

を強め、民族によって統合した、強い支配階級が成立し、かれらによって独裁的権力が掌握される可能性もないとはいえない。

さて、先の科学伝達の民族語化という希望がバシキール人のインテリゲンチヤにも無いではないが、かれらは科学術語の民族語化については難しいとすでに諦めぎみで、大してこだわっていない。

エリートの名称民族化へのこだわりは、タタルスタンの方が近代化がはやく、バシコルトスタン全体の文明化が遅れたことにもかかわっている。がそればかりでなく、遊牧の民であったバシキールの人々は西欧的文明化に対してややシニカルな態度をとってきたきらいがある。かれらのお気に入りのミュージカルの題材にそれを見る思いがした。欧米的生活と豊かさにはたいする強烈なまでの批判がコミカルに描かれ、観客に大いにうけていた。このミュージカルはバシコルトスタン生れのタタル人の作家の手になる作品で、人気が高いために再演したと劇場支配人はインタビューに答えてくれた。

民族意識へのあつい思いと民族エリートのありようを解読するためには、さらに歴史の射程を長くにとって民族の人口動態史と、マジョリティ民族との関係史を考察する必要がある。タタルスタンでは人口の上でも、民族抗争史の上でも主な対抗民族はロシア人であったが、バシコルトスタンでは、すでに見たようにロシア人ばかりでなく、タタル人もまた競争関係にある民族として存在してきた。名称民族が数の上でマジョリティにはならないバシコルトスタンでは名称民族は民族意識にこだわりつつも、ある程度各民族の調和を考えざるをえない。ナショナリズムが強すぎると、ロシア人やタタル人のグループから制御がかかるのが実情である<sup>\*24</sup>。

こうした事情を反映して、バシコルトスタンでは、たとえば、バシキール人とロシア人とタタル人がそれぞれ自身の民族劇場をもつというように、文化政策においてバランスがとれるように配慮されている。

対抗民族の数だけでなく、対抗関係のありようも大きな意味をもつ。タタル人はロシア人に攻撃された悲惨な過去をもつ。ロシアからの弾圧を逃れて現在のバシコルトスタンに移動したタタル人も多い。それに対してバシキール人はロシア人との激しい闘争を経ずして友好関係を築いた。バシコルトスタンの首都ウファ市の高台に立つバシキールとロシアの民族友好の記念碑は、向かって左にバシキール人の女性が、右にロシア人の女性が配され、中央にはロシア人の男性とバシキール人の男性が、友好の契りをおかしている彫刻があり、そこにはそれぞれのシンボルとしてクレムリンと馬車が刻まれている。

---

\*24 岡田進「バシコルトスタン：主権国家への道と経済の現状」『ロシア・ユーラシア経済調査資料』1998年12月号、18-19頁。



両共和国の首都であるカザンとウファの街の景観にいま少し注意を払ってみてもおもしろい。カザンではメチエチ（イスラーム寺院）が目立つ。ウファの場合もメチエチが見事に復興しているが、それほど目立たない。カザンではタタール人の民族意識の大きな拠り所の一つが、かれらの文化と誇りの源としてのイスラーム教だが、ウファでは民族意識の拠り所が歌や楽器や踊りといった文化に求められる傾向がある。ウファにおいて民族エリートの輩出で有名な民族学校の校長が、民族意識の形成に宗教はかかわりないと一線を画するのは、教育の宗教との分離という原則によるばかりでなく、イスラーム教が入ってくるよりも以前にあった民衆宗教によってイスラーム教を相対化しているからでもある。宗教が民族アイデンティティの核になると、民族意識の形成と強化の動向は、宗教の原理的強化に連動しかねない。その傾向がタタルスタンでは見られなくもないという、宗教関係者の弁を耳にした。彼はウファにはそういう傾向がまったくないと指摘した。

ただ興味深いことに、タタール人にもロシア正教徒がおり、その上、タタルスタンのフォルクローレ研究者によれば、ロシア正教徒タタールとムスリム・タタールの伝統的衣装を比較すると、正教徒タタールの方がブルガール・タタールの伝統をよく継承しているという<sup>\*25</sup>。ウファでは、バシキール人はムスリムで、ロシア人はロシア正教徒であり、それぞれの宗教施設でお祈りするが、両宗教の関係は良好である。その点はタタルスタンも同様で、宗教間関係は友好的である<sup>\*26</sup>。

タタルスタンでの民族アイデンティティ形成の必要や民族意識の強化の言説にエネルギーを与えている要素で、バシコルトスタンには無いものが、ディアスポラという現象である。祖国をはなれた離散の民は、元気のでる麗しい民族イメージを求め、祖国にその顕現を期待する。かれらは、差別や排他性にさらされても、一定程度の同化に努め、他民族との共存によって生き抜いてきた。かれらは祖国に、純粋な民族アイデンティティの確立をもとめる。それはかれらの連帯の心の支えでもあるからだ。だから、民族エリートの形成を応援しようとする。

ディアスポラのため祖国外に住む人々は、だからといって民族アイデンティティの虜となっているわけではない。かれらは生活の地では、ブレンドされた民族アイデンティティをもつ。換言すれば、アイデンティティの束としての「私」の中で、民族アイデンティティを突出させることなく生きている。つまり、一定の同化を介して他民族との共生を果たしてきた。自身への誇りを維持した共生の実現は、他の民族の言語と文化に、考え方と価値基準に回収されることがないことを、とりわけて支配の民

---

\*25 関啓子「比較発達社会史の冒険 - ひとりだちをめぐるタタール人の葛藤の歴史」(中内敏夫・関啓子・太田素子編『人間形成の全体史』大月書店、1998年)を参照。

\*26 同上。

族の持っていない何かを持っていることを必要とする。その源が祖国の民族文化と母語と民族アイデンティティである。祖国を離れた人々が祖国に与える影響は無視しえないものがある。

世界中のタタール人から民族アイデンティティの形成の必要を突き付けられたタタルスタンではエリートのありようが、以前の連帯的エリートから均質的エリートに少し傾斜し、独裁的権力を掌握した支配階級が形成される可能性もある。現にそうなりつつあるとの指摘も聞かれる。

しかし、ナショナルな枠組みへの傾斜に対する歯止めとして機能しうる現象がある。それは、人々が多言語のパッケージ<sup>\*27</sup>を所有していることだ。世界中のマイノリティと同様に、タタール人は以前のマジョリティの言語ロシア語とタタール語の両方を使うことができる。それに加えて外国語として、ドイツ語や英語、さらにはアラビア語を学び、トルコ語にも関心を持つ。タタルスタンの非ロシア人と非タタール人の場合、それらにかれら自身の母語が加わる。つまり、いくつかの言語をパッケージ化していて、その場のコミュニケーションを成立させる言語を選択する。現在の学校の教育課程とタタルスタンで展開している人間形成過程は、相乗的に複数言語の使用を可能にし続けるであろうと思われるが、この事態は一元的な言語支配を回避させ、さらには一元的な発想からも多言語習得者を解き放つことに連なる可能性がある。この可能性は、バシコルトスタンの方がいっそう高いように思われる。バシキール人は、ロシア人およびタタール人と折り合いをつけて生きてこなくてはならなかったため、バシコルトスタンにおいてさえ、タタール人のバシキール語の習得率（18.1%）よりも、バシキール人のタタール語の習得率（31.6%）の方がはるかに高いのである<sup>\*28</sup>。これは優位な立場に立てなかった民族の不幸とも見えるが、言語のパッケージ化の観点に立てば、多文化社会において自己を失うことなく生きられる、いわば地球市民の可能性を帯びていることを示唆している。

民族意識の育成が強調されはするが、タタルスタンの中高等教育機関における指導過程と学習形態は、ある文化、たとえば、タタール文化の伝達を効率化するものではなく、プロジェクト学習の導入や、模擬シンポジウムなど生徒のアクティビティを取り入れるものになっている場合がある<sup>\*29</sup>。つまり、ある文化の再生産と強化に尽きるものではなく、学習者が自らの考え方を打ち立て創造する余地を孕むものとなっている。しかも、かれらが学校を介したあるいは学校の外での文化の学習によって複数文化の理解による文化のパッケージを持つことになれば、先の、自分の考え方を打ち立

\*27 酒井直樹「カルチュラル・スタディーズの現在」、伊豫谷登士翁、酒井直樹、テッサ・モリス＝スズキ編『グローバルゼーションのなかのアジア』未来社、1998年、30頁。

\*28 Галляков Р.Р. Двухязычие в городах Башкортостана//Социологические исследования. -№.8, 1997. - С.53.

てる創造性はパッケージ全体の構成が所有者の独自の理解と感性とによって個別的（個性的）に組み立てられるところに発揮される。またこのパッケージの所有者はそれの構成要素のある文化に回収されることもなく、かつ、それぞれの構成要素がいろいろな文化の人々との共通項となるから、いろいろな人々と交流することができる。こうしたパッケージの所有を促し、一つの文化への執着を緩和しているのは、混血化という現象である。バシキコルトスタンにおいてそれは顕著である。

タタルスタンでは対ロシアという点でのナショナリズムは尖鋭的だが、ロシアを越えた世界に対する異文化交流には積極的である。もし、ロシアのことばかり意識していたのならば、結局はマジョリティであったロシアの呪縛からいまだ自由でないことを示すことになる。ロシアを越えた世界の諸民族およびタタルスタン内のロシア人を含む非名称民族との共生の宣言は、ナショナリズムの緩和に繋がりうるものであろう。

タタルスタンのエリート層は、権力を掌握するためにも、民族アイデンティティの形成の必要を強調し、ナショナリズムを強化しようとしているかにみえるが、かれら自身は自文化の身体化にもっとも疎い人々である。かれらこそ、ロシア文化をおさめ、グローバルな知識をも身につけ、民族文化や民族のアイデンティティに回収されきることのない存在である。かれらがナショナリズムを仕掛けたとすれば、生き方やひとりだちの仕方とさせ方のロシア化からの解放を演出し、それらを自分たちのやり方で定義する<sup>\*30</sup>次世代の育成の契機をタタルスタン社会史に書き込むことになるのではないか。この可能性はありえよう。しかし、他方では、民族文化の伝達と母語の強調、民族意識の強化に走れば、言語や文化のパッケージを持たない次世代が形成されることにもなりうる。民族共存のシナリオは魅力とスリルに富んでいてその有効性を即断しがたい。

## 参考文献

- \* 下斗米伸夫『ロシア政治の制度化 - タタルスタン共和国を例として - 』北海道大学スラブ研究センター、1997年。
- \* 西山克典「タタルスタン - 過去と現在 - 」『ユーラシア研究』第11号。
- \* 木村英亮「ロシアの中のタタルスタン」、澤野由紀子「タタルスタン共和国の教育制度」関啓子「民族アイデンティティの形成」『ロシア・ユーラシア経済調査資料』1998年3月号。

---

\*29 См.: Харисов Ф.Ф. Татарская культура в предметах гуманитарного цикла. -Казань, 1996.

\*30 Gustavo Esteva, W.Sachs (eds.), *The Development Dictionary* (Witwatersrand University Press, 1993), p.9.